

コミュニケーション論講義(1)

An Introduction to the Study of Communication (1)

岩 本 一 善

0. 序言

なぜ「コミュニケーション論」が大学・短大のカリキュラムの科目の一つにあげられている、あるいはあげられるべきなのか？われわれの考えではそれは、「コミュニケーション」が、その他にもいくつか存在する人間にとって重要な概念を内包する言葉と同様、一般的に人が時として自覚的、また時として無自覚的にその概念を自らの言動で具現化しながら、一方でその内容や定義の説明を求められるとなると途端に返答に窮してしまうような類いの言葉であるからだ。

「愛とはどんなものでしょう？」

「人は何のために生きるのですか、人生とはなんですか？」

そんな問いかけに容易に答えられるはずもないが、それでもそれを問うた方も問われた方も共に「生きる」という行為を具体的に営んでいるし、またおそらく何らかの形で「愛」というものに関わりながら生活していることであろう。また、身体の機能に異常がない人間にとっては二足歩行を行なうことなど造作もないことであろうが、では四肢を具えた生き物がどのような原理でそれを可能にしているのかとなると、その答は単純明快ではない、あるいは少なくとも近年まではそうではなかったはずだ。これと同様に、きわめて日常的で普遍的な行為を表わす概念というのは、自覚的にその内容を尋ねることがなければ、つい見過ごしにしてしまうものなのではないか。

第二に、「コミュニケーション」について考察することは、われわれをより根源的な問いへと導くことになると考えられるからだ。言うまでもなく、われわれ人間のコミュニケーションには他の生物にはない言語の使用という特徴がある。言語の使用については改めて後述することにするが、ではこの「コトバによるコミュニケーション」は人間の生活を本当の意味で「幸福」に導いたと言えるのだろうか、という問いがそれである。人間は言語によって、その場一度限りの経験を「情報」として蓄積し、時間と空間を越えて蓄積、伝達することを可能にした。

また同時に言語は、それが指し示す対象それ自体とは異なるものであるから、人間の認識を眼前にあるものの拘束から解放することによって、「今ここには存在しないもの」を想像し、かつ創造することを可能にした。それらは、他の生物にはない、人間のみがはじめて獲得しえた文化、文明の進歩を推し進める原動力にこそほかならない。それだけではない。人間は言語によって、自分が現にここに在るという意識、そして自分自身がそのような意識をもつものとしてここに在るということ、つまり「自意識」をもった存在となった。果たしてこれらのことは、人間の生活を本当の意味で「幸福」に導いたと言えるのだろうか。人間のコミュニケーションについて考えることが、直ちにそのような問いの答えをもたらすことはないかもしれないだろうが、少なくともそのような問いを発する契機にはなるであろうし、またそれが論ずるに足りない愚問であるということもないはずだ。

なぜ私たち人間だけが自分たちのコミュニケーションについて思索し、思い悩むのか。その理由は簡単だが、あれこれ巡らせる考えに対する答えは簡単ではない。そこで以上の見地から、人と人とのコミュニケーションについて論じていくことにする。

1. 定義

「コミュニケーション」という語が外来語であることはいうまでもない。しかしまた、もはやこの語が日常的に使用される言葉であることも間違いない。曰く、「あの夫婦の不仲は、コミュニケーションの不足が原因である」「インターネットは今や現代人にとって欠かすことのできないコミュニケーションのツールである」等々。ではその意味する内容は具体的にはどのようなものなのか。ごく一般的な国語辞典と英和辞典から、それぞれ「コミュニケーション」の項目に記載されている内容を抜粋してみる。

『広辞苑』第六版より。

コミュニケーション [communication] ①社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする。「マス・」(「会社内の」が悪い) ②生③動物個体間での、身振りや音声・匂いなどによる情報の伝達。④細胞間の物質の伝達または移動。細胞間コミュニケーション。

続いて『ジーニアス英和大辞典』より。

***com·mu·ni·ca·tion** /kəmjuːnikəʃən/ 【初14c;

ラテン語 communicatio. communica(te) + -tion】

——**図** 1 ㊦ 伝える[伝わる]こと; (熱の)伝導; (動力の)伝播; (病気の)感染。

2 ㊦ (口頭・文書・合図などによる)[…への]伝達, 連絡; (ラジオ・テレビによる)報道; (電話・電報による)通信, 交信; […との](相互の)意思疎通, 交際, 取引(**with**) Ⅱ Language is not the only means of ~. 言語はコミュニケーションの唯一の手段ではない / be **in** ~ **with** him 彼と連絡[通信, 文通]している。

3 ㊦㊦ (正式) (伝達された)情報, ニュース, 通知(information); (送られてきた)文書, 通信文, 伝言; 学会発表論文。4 ㊦㊦ […への]/…の間の]交通; 交通機関[手段], (汽車などの)便(to/between)。5 ㊦ [通例 ~s] (電話・電信などの)通信機関[施設]; (ラジオ・テレビなどの)報道機関; (ドア・通路などの)連結部; (道路・鉄道などの)交通網, 輸送機関; [軍事]兵站(㊦)線 Ⅱ line of ~s 兵站線, (前線と基地の)連絡線。6 [~s; 単数扱い] 情報工学[技術]; 通信工学[技術]。

いずれの記述も、「コミュニケーション」という語が日常的なコミュニケーションの中でどのような意味として使用されているのか、といった語用論的な観点からは不十分であるように思われる。

ではコミュニケーション研究者はどのような定義を下しているのか。1970年代にダンス(Dance, F. E. X.)は、コミュニケーションの定義を明確化するにあたり、「およそ4,560の語句(words and tokens)を含む約2,612のタイプの中から30の異なる術語(terms)を分類し、さらにそこから15の(コミュニケーションという)概念に関する構成要素(conceptual components)を引き出した」としている⁽¹⁾⁽²⁾。以下にそれを列記する。

1. 象徴 (Symbols)、言語使用に関する (Verbal)、スピーチ (Speech)
2. 理解 (Understanding)
3. 相互行為 (Interaction)、関係性 (Relationship)、交流の進行過程 (Social Process)
4. 不確実性の縮小 (Reduction of Uncertainty)
5. 過程 (Process)
6. 移動 (Transfer)、伝送 (Transmission)、交換 (Interchange)
7. 連結 (Linkage)、結合 (Binding)
8. 共通性 (Commonality)
9. 経路 (Channel)、伝送体 (Carrier)、手段 (Means)、ルート (Route)
10. 記憶の複製・再生 (Replicating Memories)
11. 識別反応 (Discriminative Response)、行動の修正 (Behavior Modifying)、
反応 (Response)、変化 (Change)
12. 刺激 (Stimuli)
13. 意図的な・表象的な (Intentional)

14. 時間 (Time)、場面 (Situation)

15. 作用力・権力 (Power) ⁽³⁾

こうしてタームを上げられたところで、コミュニケーション研究に従事する者にとっては得るものが大きい、一般的にはコミュニケーションという語の定義に関する漠然とした印象をいっそう掘み所のないものになっているだけだろう。さらに始末の悪いことは、ダンス自身も述べているように、この15の構成要素の区分は常に明確であるとは限らず、相互に曖昧な部分もあるということだ。

一方、マス・コミュニケーション研究の開祖の一人として知られるW・シュラム (Schramm, W.) は、コミュニケーションという言葉の語源を、「共有の、共通の、共同の」という意味をもつラテン語「コムニス (communis)」に帰した上で、「コミュニケーションをとるということは、誰かと何か共通なものを打ち立てようとするものである。つまりそれは、情報、何らかの観念や態度を、共有しようと試みること」⁽⁴⁾ であるとしている。一般的にはコミュニケーションの語源は、同じくラテン語の動詞で、「共有する」という意味をもつ「コムニコ (communico)」に帰せられることが多いようだ。

いずれにしても、コミュニケーションの定義は研究者の立場や考え方によって異なり、コミュニケーション学の分野に限ってみても、その定義は一定していない。そこでこの言葉に、ある程度ははっきりした単純なイメージを与えるために、はなはだ下世話ながら、色恋沙汰にたとえてコミュニケーションについて説明してみることにする。さて、ふとした拍子に誰かを見初め、その相手にぞっこん惚れ込んだとする。なかには「忍ぶ恋」やら「いっそ片思いでも構わない」などという人もいるのだろうが、大方の人は、もう矢も盾もたまらなくなって、「この熱い思いを打ち明けたい」だの「相手に気持ちを伝えたい」などと思うのではないか。恋愛の文脈ではこれを「告白する」と言うのだろうが、ここではより一般的にそれを〈伝える〉または〈伝達する〉ということにしておく。ところで、ただ気持ちを伝えればそれで満足かという、これまた大方の人というのは欲張ったもので、それだけでは飽き足らず、「なんとか相手にも自分と同じ気持ちになってもらいたい」「互いに恋い慕う仲になりたい」などという図々しいことを考えるようになるものだ。これが、先に上げたコミュニケーションという言葉の語源にも通じる、〈共有する〉ということになる。ただしこのとき、余程の器量よしか男っ振り、はたまたカリズマ的魅力を持ち合わせているのでもないかぎり、闇雲に自分の気持ちを伝えれば、ただそれだけでそのような相思相愛の仲になれるというものではない。相手を誠心誠意〈説得する〉ということをしなければ、〈共有する〉という目的に至ることはできないであろう。ここまで〈 〉で括った言葉、すなわち〈伝える〉または〈伝達する〉、〈共有する〉、そして〈説得する〉というのが、コミュニケーションとはなにかという問いに対する、極めて単純かつ暫定的な答えになるのではないか。

しかしここで引き続き色恋沙汰をたとえにして考えてみると、他者から愛されたいと望むということには、必ずしも自分の方から相手を受愛するという気持ちが伴わなければならない、というわけではないことに気付く。悪擦れした男や女が甘言を弄して俗に言うカモを誑かすといった類い、それはもはや自分の思いを〈伝える〉、〈伝える〉ことによって自分に好意を持ってくれるように〈説得する〉などという初心なものではなく、あの手この手でとにかく口説き落として、相手を自分の思うままに〈操作する〉ということだ。言い換えればそれは、自分の気持ちはどうあれ、ただもう相手を感化する、自分が望むとおりの反応を相手から引き出す、ということになる。問題は、このような詐術、あるいは相手を欺いて錯誤に陥れようという意図のもとになされた行為をもまたコミュニケーションに分類するのか否かということにある⁽⁵⁾。

一般的な理解では、人がある意図を持って、その意図に対してなんらかの形で意味付けをおこない、そこで意味付けられた象徴が表出または受容された段階で、それはすべてコミュニケーションである、とされているようである。つまりそれは、極端に言ってしまうと、人が他者と関係を取り交わす時に取り得るすべての手段、態度を「人間コミュニケーション」と考えてよい、ということである。しかしハーバーマス (Habermas, J.) はそのようには考えない。人と人とのコミュニケーションは、広義での言語を利用して理性的に取り交わされる関係に限定すべきであるとしている。「わたしがコミュニケーション的行為と言うのは、参加している行為者の行為計画が、自己中心的な成果の計算を経過してではなく、了解という行為を経て調整される場合」であり、「了解とは、言語能力と行為能力を備えた主体の間で一致が達成される過程である」とされるのだ。したがって、行為の対象者となる他者がどのように感じるか、考えるかということは一切顧みないで、状況や出来事へどれほど自己の意図を反映することができたのかという度合いによって評価される行為(=「道具的行為」)や、それ自身がもう一人の個である他者の理性を計算した上で、ではその意思決定にどれほど自己の望み通りの操作を及ぼすことができたのかという度合いによって評価される行為(=「戦略的行為」)は、いずれもハーバーマスの考える「コミュニケーション的行為」ではないということになる⁽⁶⁾。

言うまでもなく、他者を自己の意図に沿った方向に思考あるいは行動するように説得したり、奸計を巡らしたりするという行為もまた社会的な行為であることは間違いないだろう。では果たしてそのような行為をコミュニケーションと呼べるのか。その点はここでは留保するとして、ひとまずわれわれも「戦略的」に人と人とのコミュニケーションに関するハーバーマスのアイディアを援用し、そのようなものとして捉えられたコミュニケーションの過程において重要なメディアとなる、「言語」について考えていくことにする。

2. 言語

前節でわれわれは、「戦略的」にハーバーマスに倣って、人と人とのコミュニケーションを、その当事者が互いに情報や意見、態度、感情などの一致を目指してなされる行為の過程である、

とする考え方に与することにした。ここで「戦略的」と言ったのはそれが、人間のコミュニケーションにおいて最も重要なメディアとなる言語の機能は、何らかの情報を伝達するという狭い意味でのコミュニケーション機能にのみとどまるものではなく、何らかの行為を遂行するようなものとして作用していること、そのみならず言語の使用には普遍的な規則が存在しない、言い換えるとその根拠が無いので、言語によるコミュニケーションの成立を保証するものはなにも無いということ、以上のすでに先哲により指摘された事実を、ここでわれわれが等閑視しているわけではないということのディスプレイであるからだ。言うまでもなくこれらは、オースティン (Austin, J. L.) の『言語と行為』において述べられた「言語行為論 (speech act theory)」と、ウィットゲンシュタイン (Wittgenstein, L.) の『哲学探究』において述べられた「言語ゲーム (Sprachspiel/language game)」とをそれぞれの始祖とするものである⁽⁷⁾。これらのアイディアの重要性、妥当性について理解しながら、あえてここでは言語を人と人との間で何らかの一致を指向してなされる行為、すなわちコミュニケーションのメディアとしてのみ取り扱うことにする、われわれが述べているのはそういうことである。

なぜわれわれがそのようは方法をとるのかと言えば、「言語行為論」や「言語ゲーム」のような言語観、コミュニケーション観は、初学者である学生を徒に混乱させるばかりなのではないかと考えるからだ。したがって、コミュニケーション論を専攻するつもりのない学生に対しては、クラスで講じられるものとは別にわれわれの支持する言語・コミュニケーション観があることをきちんと断わったうえで、彼らが比較的理解しやすいであろうと思われる内容を選んで説明する必要があるのではないか。これは、なにもわれわれが学生の知的水準、理解力などを軽んじているというわけではない。そうではなくて、研究者が自らの最新の研究成果をダイレクトに学生に講じるというのもひとつの見識であると考えられるが、知識を基礎的なレベルから段階的に踏んでいったほうが理解しやすいものもあるはずだと考えるからだ。われわれは人と人とのコミュニケーションについて講じるにあたって、この後者の立場をとることにする。

2-1. 言語と伝達、思考、自意識

言語（ここで言語とは自然言語の謂であり、それは特に断わらない限り以下も同様である）というのは奇妙なものである。特に母言語というものは奇妙だ。元を糺せば自己とは無関係に外部に存在していた体系であったはずなのに、一度ある臨界点を越えて獲得されてしまったが最後、あたかも自らの血肉や骨、器官と同様に、少なくとも意識という面においては、自己の存立基盤として不可欠なものとして一体化してしまう。そうなってしまえば、われわれはその言語で反射的に感じ、思考するようになる。言語研究を専門とするものでもないかぎり、それ以外の言語による感覚 (sense) と感情 (emotion) の自覚や表出、思考 (thought) といったものは、意識の片隅にさえのぼることはないであろう。母言語以外の言語による思考があったと

しても、そのこと自体がまずは母言語による意識の意図的な操作を経るものであろうし、母言語以外の言語による感情、特に感覚の知覚や表出にいたっては、完璧な複数言語使用者（polyglot）でなければありえないことだろう。複数言語使用者は文字通り複数の母語をもつ人であるが、それ以外の言語の使用についてとなれば、やはり単一言語使用者（monoglot）と事情が変わることはないのだ。このように（母）言語というものは、そもそもは〈外部〉でありながら、獲得されたと同時に自己と分ち難く結びついてしまう〈内部〉でもあるものである。佐藤信夫は次のように述べている。

～母言語は《私自身の》ことばである。

にもかかわらず、それは《私だけの》ことばではない。私は日本語を、一億以上の人々と共有し、何千年来の無数の先輩達と共有している。私が生まれたとき、私の母語は（妙な言いぐさだが、私抜きで）すでにできて、そこにあったのだ。私は、あとから日本語のなかへ参加させてもらった。ある言語文化のなかへ、私たちはみな新参者として加盟する。

言語学者や哲学者がしばしば、言語は制度であるという。この的確な比喩がおしえてくれるさまざまなことがらのなかに、言語とは自分の内部の《他者》である、というまことに切実な事実がある…と、私は思う⁽⁸⁾。

この、〈外部〉でありながら同時に〈内部〉であるものをメディアとしてコミュニケーションを取り交わすということ、ここに人間のコミュニケーションの肝要があるような気がしてならない。もはやその媒介なしでは、少なくとも自己の心的な基盤が存在し得なくなるようなものでありながら、もともと自己に生得的に備わっていた属性に由来するのではなく、それが使用されている社会に共有されるメディアとして開かれているもの、それが言語なのである。そしてそのようなものである言語が、現在の世界に数千種類も存在しているらしいということが、なおいっそう人と人とのコミュニケーションというものをニューサンスなものにしているとも言えるのだろうが、それはここで取り上げるべき話題ではない。

一方、この言語によってわれわれは、直接的現実の拘束から解放され、今そこに存在するモノ、コト以外について考えることができるようになった。また言語によって、その場限りの個別的な経験を言語という記号に変換して保存し、それを後世に伝達することができるようになった。まさに言語というものが文化を形成し、「自然」を「文化」に推し進めるドライブになったといえるだろう。一例をあげると、ウィルバーとオーヴィルのライト兄弟が、アメリカ合衆国ノース・カロライナ州キティ・ホークの丘で、人類史上初めて動力機関付きグライダーの飛行実験に成功した、すなわち飛行機というものが誕生したとされるのは、1903年12月17日のことだという。ちなみに、その時の飛行機は12馬力のガソリン・エンジンを積載した複葉機で、

その日の最高飛行記録は滞空時間が59秒、飛行距離は260メートルであったとのことである。それからたかだか100年と少々しか時間が経過していないにもかかわらず、今では私たちの頭上を巨大な金属の塊であるジャンボ・ジェット機が飛び交っている。それどころか、旅客機というのは人を載せて運ぶ輸送機関の中でも最も安全性の高い乗り物のひとつだとされている。これは驚くべき事態であるはずなのだが、そんなことに気を留める人はごくまれである。これが、言語をもたない動物であったとしたらどうであろう。たとえば、沿海地域に群生するニホンザルの中に、偶々その群にとっては新奇な行動をとった個体があったとする。泥のついたイモを海水で洗い、泥汚れをとると同時に乙な塩味を加味してそれを摂食したニホンザルがいたとしよう。他の個体は、それを遠巻きに眺めながら、やがておっかなびっくり自分も同じような行動を試してみるかもしれない。いわゆる「猿真似」というやつである。やがて、初めは一匹の個体が採用したにすぎない新奇な行動が、群全体に行き渡るかもしれない。その後、なんらかの事情でその群が沿海地域を離れざるを得ない事情が発生したとする。何代かに渡る世代交代を経た後、再びその群が海沿いに戻ってきたとしたら、泥のついたイモを海水で洗うという行動が伝達されているということはあるだろうか。否、ありえないはずだ。言語をもたない動物の思考は、本能にインプットされたもの以外は「今、ここ」という眼前の事実拘束されるからだ。

ただし、言語の使用により「自然」を「文化」「文明」へと変えていく力を獲得したことは、プラス要因としてのみ機能したとはいえないかもしれない。「文化」「文明」それ自体に対する価値的判断は留保するとしても、である。人は言語の獲得により「自意識」というものをもつようになった。それと同時に人は、もしかすると考えなくてもよいかもしれないことを、くよくよ考えるようになったのかもしれない。酷寒の南極でブリザードに吹きつけられながら一心不乱に卵を温めている（少なくともそのように人からは見える）エンペラペンギン、灼熱の砂漠でひょいひょいと交互に四肢を持ち上げて暑さをしのいでいる砂漠のトカゲ、そのような苛烈な環境に暮らす野生の生き物たちは、生きていくにはあまりに過酷な条件の下、自分のおかれた環境とガラパゴス諸島でぬくぬくと暮らす同じ科の個体の生活とを比較し、自分の運命を呪い、もういい加減いやになって自死してしまおうかなどと考えることがあるだろうか。否、淡々と死ぬまで本能の命ずるままに生き続けるだけである。われわれのように自意識をもつものからすれば必死で生き抜いているように見える生物も、実際にはただ単に本能のまま「生きる」ということをしているだけなのである。自意識をもたないということは、言語（コトバ）がないということであるから、当然意味や価値などをもつこともないし、自らの置かれた状況を他者と比較することもない。感じて動くことだけがすべてであるが、だからといって人間のように摂理を破壊してしまうようなことをしてかすわけでもない。そのように考えると、言語というものがわれわれの文化、文明の発展に貢献してきた役割に畏怖すると同時に、果たして言語を獲得したことが本当に人にとって「幸福」なことだったのかと考えざるを得ない。そし

てまた、人と人とのコミュニケーションについて学ぼうとする初学者にも、このようなことに思いを致してもらえればと感じる。

2-2. 言語（コトバ）記号の構成と特質

言語化される以前の意味、〈概念〉というものが精神にあらかじめ存在して、それが言語記号の外形、つまり音声や文字といった〈容器〉と結び付くことによって表出可能なコトバとなる、われわれはそのような素朴な言語記号観に与するものではない。それでも、言語記号をすでにそのようなものとして存在してしまっているという静的な状態から記述するとなると、それは「外形（表象）と意味（内容）とが結合した人為的象徴記号」である、とするのが自然であろう。言語記号の「意味」とはなにか、それについては後述することとする。

ここで「人為的記号（artificial sign）」とは、記号とそれが表している意味との間の連関が人為のプロセスによって結合された記号であるということである。これに対して、「煙が立ち上っていればその下に火が燃えているはずだ」、「稲妻が走ればやがて雷鳴がとどろくであろう」といったように、原因と結果とが自然法則により結合されているものは「自然的記号（natural sign）」とされる。自然的記号はすべて「信号（signal）」に分類される。信号の特徴は、記号とそれが表示している内容との間に常に固定された一義的な連関があることにある。したがって、交通信号や地図記号、コンピュータの機械言語のように、人為的記号に分類される記号の中にも信号は存在する。

「象徴（symbol）」というのは、本来はその記号とそれが表している内容との間にそれ自体の特質に基づく因果関係が存在していないにもかかわらず、人間のもつ表象的意味作用がそこには無いはずの意味を見出してしまったことにより形成される記号のことである。言語もこれにあたる。そして言語に代表されるような人為的象徴記号には、〈随意性〉、〈多義（曖昧）性〉、〈象徴性〉という特質があるとされる。（以下、次号）

注

- 1) Dance, F. E. X. *The "Concept" of Communication*. The Journal of Communication Vol. 20, 1970, pp. 201-210.
- 2) 数えてみればわかることだが、実際にあげられているタームは29である。
- 3) タームの訳語はいずれも引用者による。
- 4) Schramm, W., 'How Communication Works' in Schramm, W. (ed.) *The Process and Effects of Mass Communication*. Urbana, IL: Univ. of Illinois Press, 1954.
- 5) 「詐術のコミュニケーション」については、[岩本一善「人間コミュニケーションにおける闘争的諸様相に関する一試論」、『山手日文論攷』、第22号（2001）]で言及した。
- 6) Habermas, J., *Theorie des Kommunikativen Handelns*. Verlag, Frankfurt/Main, 1981. [藤沢賢一郎・岩倉正博・徳永恂・平野嘉彦・山口節郎訳『コミュニケーション的行為の理論（中）』（未来社）、1986、pp22-23]

- 7) Austin, J. L., *How to Do Things with Words*. Oxford Univ. Press, 1962 (2nd. ed., 1975). [坂本百大訳『言語と行為』(大修館書店)、1978]、Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*. 1953. [藤本隆志訳『哲学探究』(大修館書店)、1976]
- 8) 佐藤信夫『レトリック認識』(講談社学術文庫)、1992、p 56。